

# カイサリアのバシリオスの書簡から見る 「伝道者」像についての一考察

飯 田 仰

## 1. はじめに

4世紀における伝道者像とは何か。本論文ではこの問い合わせを考察するために、カッパドキア教父の一人カイサリアのバシリオスの書簡の一部を通して垣間見ることのできる「伝道者」像なるものを考察することを目的とする。新約聖書の記述から続く初代教会において徐々に形成されたと思われる「伝道者」像は4世紀後半の時代においてどのような形で踏襲され変遷していったのか。また、この時代には果たして伝道者の新たな「役割」とイメージなるものが存在していたのだろうか。書簡の中に残されたバシリオスの言葉を通して確認できる内容を纏めることで、彼が今日の我々にも示唆に富んだ言葉を残していることを確認していくことをここでは試みる。

### 1.1 「伝道者」とは

古代教会における「伝道者」とは、一体どのような理解そして位置づけがなされていたのか。この問い合わせは古代教父たちの間では難しい問い合わせである。なぜなら、古代教父たちの残した著作の中で「伝道者」という表現は稀有だからである。新約聖書に基づけば、使徒言行録20章17節や28節、また、テトスへの手紙1章5節や7節などに登場する *πρεσβύτερος* や *ἐπισκοπός* といったものが存在するのであるのかもしれないが、これらの理解も2014年に上梓されたAlister C. Stewartの研究書によると同義語ではなく、それぞれの役割分担といったものが存在していたことが徐々に明瞭となってきている<sup>1)</sup>。4世紀後半

においては、「長老」や「監督」といった立場の者がどのような役割と職務を担っているのかが多少明確化されてきたが、それはまだ途上にあったと言える。本論文の主旨から逸脱してしまうため、Stewart が提示する議論についての検証はまたの機会にするが、彼の議論は大変興味深いものであり、古代教会史の領域だけに留まらず、多岐にわたる検証がなされる必要のある問題であることは間違いない。

ここでは、「伝道者」とは何かという問い合わせに対して古代教父学的観点からは断言できないという前提で議論を進めていくが、それでも、バシリオスの書簡を通して垣間見えてくる「伝道者」像というものが実存することは間違いない。本論文ではそのことについて議論を進めていく。その「伝道者」像を大きく分別すると以下の四点になる。「伝道者」とは、(1) 神からの召命を受けた者、(2) 教区における教会の担い手として教会の一致を保持し、牧会の働きに携わる者、(3) 正統信仰に立ち、正統神学を固守する者、そして(4) 書簡を執筆し、「メディア伝道」<sup>2)</sup>を担う者、と表現できるであろう。

## 1.2 バシリオスの書簡における「伝道者」像とは

バシリオスは書簡を通して多岐にわたる内容を扱い、それらは後代へと残されていった。これらの書簡を読み進めていくことで、当時の彼らの状況及び彼らが直面していた課題と現実生活の様子が描かれていることに気づかされ、それは示唆に富んだ内容であることがわかる。では、実際にどのような内容を扱っているのか、次にみていきたい。バシリオスの書簡は今日 368 通が残存する。その中から選択した以下の書簡は、Georges Barriois の書籍を参考として便宜上、本論文の筆者が選んだものである<sup>3)</sup>。

1) Alister C. Stewart. *The Original Bishops: Office and Order in the First Christian Communities*. Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2014 を参照のこと。

2) 「メディア伝道」という表現は現代的な表現であり、時代錯誤的であることは承知した上で、敢えてこのような表現をここでは用いている。

3) Georges Barriois, trans. and ed. *The Fathers Speak: St. Basil the Great, St. Gregory Nazianzus, St. Gregory of Nyssa*. Crestwood, NY: St Vladimir's Seminary Press, 1986. 本論

## 2. 神からの召命を受けた者

先ず重要なこととして挙げられるのは、神からの召命を受けた者が「伝道者」であるということである。ここでは主に書簡 161 と 190 の二通を扱うこととする。

### 2.1 書簡 161

書簡 161 は、アンフィロキオスが監督（έπισκοπός）に叙階される際に、彼に宛てて書かれた書簡であることがその題目から理解できる<sup>4)</sup>。アンフィロキオスに対してバシリエイオスは冒頭でこう述べる。「その時代において神によって選ばれた者たち、神に喜ばれ、神の選びの器を知らしめる者たち、神の恵みの回避不能な網にかけられた者たち」を呼び出される神ご自身が祝されるよう、と<sup>5)</sup>。この者たちは、悪魔によって既に捕らえられた者たちを神の御心によって、その深みから光へと導き出す者たちであるとし、ダビデが述べたように「どこに行けば／あなたの靈から離れることができよう。どこに逃れれば、御顔を避けることができよう」（詩編 139:7、新共同訳）と、あなたも述べるべきであるという。神によって選ばれ、呼び出された者は、その神の存在からもはや逃れることはできない。よって、その召命に従うべく、勇敢であれと激励するのである。

バシリエイオスは、この神からの召命を以下のように説明する。「キリストに希望を置いた者たちは一つの民とされ、キリストに従う者たちは今、一つの教

---

文ではバシリエイオスの書簡は、E. Capps, T. E. Page, W. H. D. Rouse and G. P. Goold, eds. *Saint Basil: The Letters: Greek*. William Heinemann; G. P. Putnam's Sons; Harvard University Press, 1926-1934 を参照した。

4) Αμφιλοχίῳ, χειροτονηθέντι ἐπισκόπῳ

5) Εὐλογητὸς ὁ Θεός, ὁ τοὺς καθ' ἐκάστην γενεὰν εὐαρεστοῦντας αὐτῷ ἐκλεγόμενος, καὶ γνωρίζων τὰ σκεύη τῆς ἐκλογῆς, καὶ κεχρημένος αὐτοῖς πρὸς τὴν λειτουργίαν τῶν ἀγίων· ὁ καὶ νῦν σε φεύγοντα, ὡς αὐτὸς φήσ, οὐχ ἡμᾶς, ἀλλὰ τὴν δι' ἡμῶν προσδοκωμένην κλῆσιν, τοῖς ἀφύκτοις δικτύοις τῆς χάριτος σαγηνεύσας

会である。その地は、一人の『人』を通して教会全体（諸教会）を得た。これはその地域の教会に一人の監督が置かれたということを意味しているようである。そして彼はアンフィロキオスにその「人」となり、雄々しくあれと鼓舞する。至高のお方があなたの手に委ねてくださった人々の前で、雄々しくあるようにというのだ。

その職務はあたかも船乗りのようである。賢い操舵手のように船を操縦し、「異端の嵐の中を、風と海をしかつてくださるお方の尊い声が聞き出されるまで、過ちの波に沈むことのないようにあなたの船を守り抜きなさい」と述べていくのである。それはまた、道案内を行うガイドのような存在でもあり、この導き手として神に召されたことが強調される。

書簡の終わりにおいて、バシレイオスは更に豊かな比喩的表現を用いて書簡を閉じるのだが、これがまた大変味わい深い。彼はこう述べる。「善き行いにおいて、あなたの教会がぶどうの樹のように育ち、あなた自身、賢い農夫、善き僕として、民に必要な肉を適宜与える者として、忠実で賢明な監督としての報酬を得ることができるよう」。このような言葉を送ることによって、バシレイオスは教会の監督として召された者にとって、その召命は神ご自身から与えられたものであること、そしてその職務は教会のためであり、教会を養い続けることであることを確認するのである。

## 2.2 書簡 190

当書簡も同じくアンフィロキオスに宛てて書かれたものである。イコニオムの監督であったアンフィロキオスに対して、バシレイオスは神の召命の重要性について語るのである。当時、アンフィロキオスはイサウロス教会 ( $\tau\eta\varsigma\ \acute{e}kk\acute{e}l\eta\varsigma\tau\alpha\varsigma\ \acute{I}sa\acute{u}r\omega\varsigma$ ) の事柄にも深く関わりをもち、そこで働きに従事する「働き人」を探し求めていたようである。ここでは「複数人数の監督 ( $\pi\lambda\acute{e}i\varsigma\eta\varsigma$ )」にその職務を委ねた方がよいとの見解を、バシレイオスは示す。複数人数でその負担を分担するように推奨するのである。だが同時に、このような働きに相応しい人材を見つけ出すのは困難であることにも言及し、更に多

くの人によって神の教会が纏め上げられるようにと願っている。彼らが直面していた問題はどうやら、神の召命に相応しくない形でその職務に従事している者たちの存在であったようである。その召命に相応しくない事柄によって、無意識のうちに神の召命が軽蔑されていると嘆くのである。

神の僕とは、恥ずべきところのない者であり、自分自身の事柄に関心を寄せるのではなく、他の多くの者が救われることに関心を示し、その救いを切に願う者であるべきだという。しかし問題は、そのような者を見い出すことが難しいということだとバシレイオスは述べる。もしそのような神の召命を受けた者を見出しができれば、それは教会にとって大変有益なことである。更に、小さな村の教会に先ず就任させ、時機を見て都市部の教会に任命できるようにすればよいとの指導も行い、その者たちがこの職に果たして相応しいのか否か判断できる、試験のような制度を設けることで慎重に承認することが望ましいという。

駆け足でこの二通の書簡の概要を紹介したが、これらの内容を見る限り、監督として教会の働きを任されるべき者に対して重視されていたのが、神からの召命の有無であったようであることは明らかである。そして究極的には神の宣教の働きを担い、神の群れを養うために自らを捧げる者であることが強調されていたと言える。この召命がなければ、あるいは明確でなければ、働き人はそもそもその働きを始めることができないのであった。だが、それだけではないことが、この後の検証で更に明確になっていくのである。

### **3. 教区における教会の担い手として教会の一致を保持し、牧会の働きに携わる者**

バシレイオスたちが考えた「伝道者」像には先ず、神の召命を受け、教会を指導する立場の者として教会を養う者であるという概念があったが、同時にそれは教会の一致を保持するために必要不可欠な存在であったということが言える。そのことを、書簡 90, 203 と 204, そして 243 等から見ることができる。次に、これらの書簡の概略を確認しつつ、通奏低音として在る教会の一致の保

持者としての「伝道者」像、そして自らに託された教会の牧会に携わるのみでなく、「教区」という広い範囲での「伝道者」の働きに従事することが何を意味したのかを見ていく。その作業を経て、我々はバシリオスが奨励していた「伝道者」の姿を垣間見ることができるのである。

### 3.1 書簡 90

当書簡は、西方教会の監督たちへ宛てて書かれた書簡である。この監督たちはアナシオスの系統にいることが確認された者たちで、ニカイア神学を踏襲している者たちであった。バシリオスはこの書簡で、如何に彼ら相互において「同意（*σύμπνοιάν*）」と「一致（*ένότητα*）」が保たれているかについて言及する。それは聖霊による交わり（*κατὰ τὸ Πνεῦμα κοινωνίᾳ*）による一致を実現させ、我々を一つの体として調和のとれた状況へと高めていく（*εἰς τὴν ἐνὸς σώματος ἡμᾶς συμφωνίαν ἀναλαμβάνειν*）のだという。

バシリオスたちが当時直面していた問題とは何であろうか。具体的な記述はここにはないものの、それは教会を混乱させる悪であり敵の存在であったようである。この者たちは教父たちの教えを蔑ろにし（*καταπεφρόνηται τὰ τῶν πατέρων δογματα*），使徒的伝統（*ἀποστολικαὶ παραδόσεις*）を無視しているという。この世的知恵が第一とされ、十字架の栄光が蔑ろにされてしまっているという。更に教会の牧者たちは追放され、代わりに問題を起こす狼たちが居座っている状況についても言及される。もし愛の慰めというものが存在するのであれば、もし聖霊の交流があるのであれば、もし憐れみの器がいくつかあるのであれば、我々への助けを惜しまないで欲しい、とバシリオスは呼び求め続ける。教会内に異端的教えが侵入し混乱を巻き起こしている様子が垣間見られる。本論文でもこの後、確認するが、バシリオスはこの教会の一致が正統的信仰理解・正統神学によって成し遂げられると考えているようである。ここでも彼は次のことに言及する。御子は御父と同質（*όμολογεῖται*）であり、聖霊は同様の栄誉と崇敬を得る<sup>6)</sup>というこの健全な教義において教会は建て上げられていくべきであるというのである。

### 3.2 書簡 203, 204

書簡 203 は沿岸地域の監督たちに宛てられた書簡であり、書簡 204 はネオカリサリアの人々へ、と題されている書簡である。これらの書簡もまた「一致」ということを強調しているものであると言える。書簡 203 においてもまた異端の荒波について触れられ、しかもそれが怒り狂うほどのものであったことが窺える。離れた沿岸部にある教会だからといって異端の荒波の影響を受けることはない、他からの支援を必要としていないと思ってはならないとバシレイオスは指導する。地理的距離感が認識の齟齬を表象しているのであろう。ここで強調されることは、我々の主は一人であり、信仰は一つ、望みも同じであるという点である。この認識の齟齬はキリストの教会を建て上げること ( $\tauῶν εἰς οἰκοδομὴν τῶν ἐκκλησιῶν τοῦ Χριστοῦ$ ) の妨げとなるため、こうした要素の如何なる事柄においてもそれを蔑ろにしてはならないと励ますのである。これは自らの教会だけの問題ではなく、地域全体の、教区全体の、そして究極的にはキリスト教界全体の健全な状態を保持するために固守されなくてはならないことだという。

これはコリントの信徒への手紙一 12 章 12 節以下に記されているパウロの言葉を彷彿させる。実際、バシレイオスはこの聖書の御言葉を引用しながら議論を進めており、彼の中にある想いは神の体である教会の一一致であり、そのことを死守するために監督たちはその職務に立てられていると理解するのである。「伝道者」とは、そのようにして教会の健全さを守り抜く者でもあることが、ここからもわかる。

更に書簡 204 でも、一つとなることの重要性について言及され、そこには愛の実践を伴う必要があることについて教示されている。教会内の異端的な立場に固執してしまっている者たちに対して、正しい判断と導きを行えるようにと励まし、そのためには真理から目を離すことなく、真理を見失わないようにし

---

6) καὶ τὸ Πνεῦμα τὸ ἄγιον ὁμοτίμως συναριθμεῖται τε καὶ συλλατρεύεται

なければならないと述べる。なぜなら、真理を見失うことほど悲惨なことはないからだと、バシリオスは言う。この判断を行うのが教会の監督たちであるとする。世の中には様々な事柄が存在するが、その善し悪しの判断を下すことができるのはそれらに精通している者たちであるとし、聖霊が宿っている者にしか聖霊のことはわからないのだが、語られる言葉が聖霊の言葉か否かは聖霊を持っている者にしかわからないという。つまり、何が正しく何が異端的なのかの判断を委ねられているのが教会の監督であり、教会を牧し、養い、その一致を固守し続けることが監督の役割なのであるというのである。

バシリオスはここで祖母マクリナについて短く言及する。彼女が直接グレゴリオス・タウマトゥルゴスの薰陶を受け、彼から学んだことが、バシリオスの理解、そして彼自身の生涯にとって大きな要素を構成しているということの確認がなされるのである<sup>7)</sup>。それ故に、アレイオス派の忌まわしい冒瀆によっても教会は揺らぐことなく存在し続けるのだが、そのためにも教会の健全さと清さを保つために監督たちが務めねばならないことを強調するのである。

バシリオスはアンテオケ教会の問題に関して6通の書簡をアタナシオス宛に送付しているのだが、そこではアタナシオスからの返信がなかったものと思われる<sup>8)</sup>。だが、この書簡204についてはアタナシオスからの書簡が1通届けられたことについて述べられており、それは希望する者には誰でも、いつでも呈示することが可能であるという。アタナシオスからの書簡にはこう書かれていたという。アレイオスの過ちに気づいてその過ちから離れ、ニカイア信仰を

7) 祖母マクリナの存在と、バシリオスに対する影響については今後の研究課題である。教会という制度の中で直接的な働きを担っていなかった祖母マクリナであるが、彼女の存在は非常に大きいことが、バシリオスや弟ニュッサのグレゴリオスの書物からも窺える。すると祖母マクリナもある意味、「伝道者」としての役割を担っていたと言うことが可能なのかどうか。この点についての探究が更に求められる。この点は勉強会にて田中従子師と本城仰太師より大変有益なご指摘をいただいた。

8) 抽論「教会の一一致を求めて——カエサリアのバシリオスからアタナシオスに宛てられた書簡の考察」『神学』第85号（2023年）、70-85頁を参照されたい。

告白することに立ち帰る者が現れたなら、教会はその者を拒んではならない、受け入れなければならない、と。これはおそらくアタナシオスの晩年の見解を表した書簡であろうと考える。以前はアレイオス派に加担する者たちを徹頭徹尾拒絶していたアタナシオスであるが、その立場が多少緩和されたことが窺えるのである。

教会には様々な状況が存在する。その様子は様々な地域の教会からの書簡を通して窺えるとバシレイオスは言う<sup>9)</sup>。だが、その根底にあるのは一つの教会の一致であり、それを判断し、教示し、指導し、牧会していくのが監督の職務であるというのである。そのためにも相互訪問をせよとバシレイオスは言う。監督たちによる相互交流と訪問こそが、主が教え導かれる、互いを愛し合うことに繋がるのである。これぞまさに「伝道者」としての姿なのであると言わんばかりの内容である。

### 3.3 書簡 243

この書簡はガリアとイタリアの監督たちへの書簡である。ここでもキリストの体である教会の一致についての言及がなされ、その後、バシレイオスたちの住むカッパドキア地方の現況についての説明がなされていく。それは教会内部を発端とする迫害の存在についてである。その迫害とはキリスト者と自称する者たちから齋されており、教会の指導者たちが砂漠へと追放されてしまっている状況についての報告がなされる。今ではキリスト者の集まりもなく、教師たちもおらず、救いについての教えも齋されず、集会も、賛美を歌う夜の集いも、聖餐にあずかるための集まりもない教会まで出現してしまい、そうしたところでは、唯一の御子が否定され、聖霊も否定され、多神教が蔓延っているという。「御子」とは本質を表す言葉ではもはやなく、何らかの荣誉ある呼称でしかなくなってしまっているというのだ。また、聖霊は三位一体を締め括る存

---

9) 本論文の「5. 書簡を執筆し、「メディア伝道」を担う者」で、書簡のやり取りについても触れる。このような媒体を通して教会の働きは推進され、「伝道者」たちは最終的にキリストの福音を広めていったと捉えられるのではないかと考える。

在ではなく、その神性と祝された本質を分かち合う存在でもなく、被造物の一つとして捉えられ、目的もなく、御父と御子に無作為に付け加えられた存在に貶められてしまっているとも述べる。何が原因でこのような迫害が起こったのかは不明であるが、カッパドキアの教会の一部で起こっていた異端の荒波について物語られているのである。まさに、教会を守るために存在すべき指導者、牧者を失った群れの悲惨な様子がここに如実に描かれているのである。

#### 4. 正統信仰に立ち、正統神学を固守する者

バシリエオスの書簡から見る「伝道者」像は、神の召命を受け、教会の一致を守り抜き牧会に携わる者として描かれているだけでなく、更に正統神学を固守する者として描写されていることについて見ていく。

書簡のやり取りにおいても、バシリエオスは正統神学的内容を繰り広げた。その目的は教会の健全さを促進するためでもあり、異端者たちの影響力をそぎ落としていくためでもあったと考えられる。

以下では書簡の内容に沿って考察を進めていくこととする。

##### 4.1 書簡 9, 38, 52——「ヒュポスタシス」と「ウーシア」について

これらの書簡でバシリエオスは「ヒュポスタシス」と「ウーシア」について触れ、その相違点等についての説明を展開する。書簡 9 は哲学者マクシモスに宛てられたもので、主にディオニシオスの著作と主張についての探究がなされている。ディオニシオスの主張する立場は所謂「アノモイオス」( $\tauῆς κατὰ τὸ Ανόμιον λέγω$ ) 的立場である。御父と御子は「異質」であるとするこの主張は、バシリエオスによれば、サベリオス主義に抗うことをあまりにも強く望みつつ提唱されたものであろう。それ故に、ディオニシオスはヒュポスタシスにおける「異質」だけに留まらず、御父と御子はウーシアにおいても異なるのであると主張し始めてしまったのであるという。結果、一つの悪をもう一つの悪と交換してしまった ( $κακοῦ μὲν αὐτὸν κακὸν διαμεῖψαι$ ) ことになるとバシリエオスは指摘する。別の誤った理解へと陥ったのである。

のことによって、聖霊理解においても大きな誤謬が生じてしまった。礼拝される存在である聖霊の神性（τῆς προσκυνουμένης αὐτὸς θεότητος）から聖霊を追い払ってしまったというのである。このような冒瀆を犯したのがディオニオスなのだという。

ここでバシレイオスが立ち帰ろうとするのがニカイア信条である。「光からの光であり、まことの神からのまことの神（Φῶς ἐκ Φωτὸς καὶ Θεὸν ἀληθινὸν ἐκ Θεοῦ ἀληθινοῦ）」この文言は妥協してはならないものであり、ニカイアに招集された教父たちが纏め上げた信仰告白の表現なのである。ここに立ち帰ることが求められる<sup>10)</sup>。

弟ニュッサのグレゴリオス宛に執筆されたとされる書簡 38 では、更に一步踏み込んだ形で、ヒュポスタシスとウーシアの相違点についてのバシレイオスの解説が繰り広げられる<sup>11)</sup>。先ずバシレイオスは「一般（κοινὸν）／特殊（ἰδικωτέραν）」の議論から話を進めていく。名詞には一般的な概念を表象するものがある。例えば「人間」のような名詞であり、それは一つの類を示すものとして在り、特定の人を指すものではない。一方で、特殊概念として理解しようとする場合、それは類の一般的な要素を示すのではなく、特殊なもの、特定されたものに特化される形でそのものを表象することになる。例えば「パウロ」や「テモテ」といった名称によって表象されることになる。これらの名称は一般的な概念における共通要素への言及をもはや保持しておらず、それらの名称によって具体的且つ特殊な実体を指し示すことになる。それは特定の事物への限定であり、この限定はその類への参与を意味しないのである。そしてこれはもはや共通する性質に言及するものではなく、むしろ包括的な用語から切

10) もっとも、バシレイオスはここで「本質の類似性（τὸ ὅμοιον κατ’ οὐσίαν）」という表現の採択を自分は好む、なぜなら、これが最も無難な表現であるからだと述べている。

11) 「ウーシア」と「ヒュポスタシス」の相違については土橋茂樹「バシレイオスのウーシア—ヒュポスタシス論」『中世思想研究』第 51 号（2009 年）、25-41 頁を参照のこと。土橋氏の分析は『エウノミオス反駁』と『聖霊論』に関してのものであるが、アリストテレスやプロティノス等のギリシア哲学の影響の有無に関しての検証（34-40 頁）は、特に裨益するところが大きい。

り離すことで、これらの名称の指し示すものが何であるかを特定することになるのだという。例えば、「パウロ」や「シルワノ」そして「テモテ」といった名称がその本質を表すように、パウロの本質に一つのある用語を適用する場合、シルワノの本質には別の用語を適用し、さらにテモテの本質にも別の用語を適用するという形をとることがあるという。と同時に、パウロの本質を表そうとする一般的な用語をもう二人の方にも適用させることもあり、その同じ用語によって言及された者たちは、その相互関係において「同質（όμοούσιοι）」なのであるという。

バシリエオスはこの書簡において、父、子、聖霊なる神の「関係性」についても言及する。父、子、聖霊なる神においては継続的な断絶されない「関係」が見られることを示し<sup>12)</sup>、我々が信ずる聖なる三位一体<sup>13)</sup>において、如何なる過程を経たとしても辿り着く三位一体理解において、またその栄光を仰ぎ見る際に、その理解においてと同じ過程を経てこの理解に辿り着くというのである。これが可能なのは父、子、聖霊の中において間隔がないからなのであるという。仮にもし三つの「位格」それぞれが独自のものであり、三位一体の複数の構成員の存在の特徴的なしるしであるとするならば、御父が「生まれたものではない（τὸ ἀγεννήτως）」ものとして存在することが御父に特有であると認識され、御子が御父の個別的な特徴によって形成されたのであれば、御父だけに特有な意味で「生まれたものではない」と呼ばれるることは、もはや御父のみに残ることはないことになるという。しかし、ここで重要なのがやはり御父と御子の密接な「関係（σχέσεως）」なのであり、御子において御父のヒュポスタシスを見ることができるのだという。それは御子のヒュポスタシスが御父の「形（μορφὴ）」として示されることを意味し、御父のヒュポスタシスが御子の形を通して示され、そこに見出される個別性は、それぞれのヒュポスタシスの明確な区別をも示すこととなるのである。

書簡 52においてもこの議論は継続されていくが、この書簡は修道院で生涯

12) ἀλλά τινα συνεχῆ καὶ ἀδιάσπαστον κοινωνίαν ἐν αὐτοῖς θεωρεῖσθαι

13) ἐν τῇ ἀγίᾳ Τριάδι πιστευομένων

を送ろうとした女性たち（Κανονικαῖς）に向けて書かれたものようである。ここでバシレイオスは、自らの主張がニカイア教父たちの伝統を踏襲したものであると言及しており、ホモウシオス（όμοουσίου）が未だ広く受理されていない様子について述べている。バシレイオスはこの議論を進めるにおいて、マタイによる福音書28章の「大宣教命令」について触れ、聖霊が御子の前に来るのでもなく、区別されているのでもないことについて述べ、もし聖霊が神からのものでなく、御子を通してでないのなら、存在すらしないのである<sup>14)</sup>、という。聖霊の存在についての否定は、正統信仰全体の否定にも繋がるとして、これを忌避するよう促しているのである。

こうしてバシレイオスは正統信仰、また正統神学とは何かについて言葉を並べ、詳細に議論を進める。このように正統信仰の理解を擁護し流布させることが監督に求められている務めであり、それはニカイアの伝統に立ち帰ることであることを明言していくのである。

#### 4.2 書簡 210, 214, 263——サベリオス主義について

書簡 210, 214, 263において、バシレイオスは当時異端的教説を流布させていた者たちについて言及していく。書簡 210 では、そのような状況下にある教会の姿を嵐の中の船にたとえて述べている。ここではサベリオス主義の悪について言及され、サベリオス主義はキリスト教の姿に見せかけたユダヤ教的な教えであるという。それは三人の中から一人を見い出そうとする試みであり、神の独り子である御子のあらゆる事柄を否定し（人の間に住まわれたこと、よみへ降られたこと、復活、裁き等）、聖霊の特別な活動をも否定するのだと述べる。そこでバシレイオスが注目するのは、ここでもマタイによる福音書28章の御言葉である。その 19-20 節において示されている命令の内の、「父、子、聖霊の名によって」の「名」が単数であり複数ではないことに着目し、これは父、子、聖霊の本質が同じであることを示していると理解する。それは神性

---

14) εἰ δὲ μή ἔστιν ἐκ Θεοῦ, διὰ Χριστοῦ δέ ἔστιν, οὐδέ ἔστι τὸ παράπαν

(神格) は一つであるからだという。だが、名はそれぞれ異なる。我々の理性がそれぞれの特性における混乱から解放されない限り、御父、御子、そして聖靈に対して頌栄を捧げることは不可能であるとし、ここで彼は御父、御子、聖靈が我々の礼拝の対象であるという点を強調する。

他方、バシレイオスは、サベリオス主義とは異なる多神教的教の流布と異端の存在についても言及する。そして、この世的な関心事と情熱によって暗闇へと嵌まっている魂は聖靈の光を受け止めることができないのだと述べ、この書簡を閉じていく。

書簡 214 でもサベリオス主義への反駁についての言及があり、また、書簡 263 では異端的教の流布している者たちの具体名が列挙される<sup>15)</sup>。このように具体名が列挙されているのは書簡の中でも稀である。

#### 4.3 書簡 99, 125, 251——ニカイア信仰に移行した人たちについて

異端と見做された者たち以外に、「改心」した者たちのことについても書簡の中では扱われている。これらの書簡は、バシレイオスの時代にもアレイオス派からニカイア正統派へと移行した者たちが存在していたことを物語る。書簡 99 で、バシレイオスは自らの葛藤を表す。エウスタティオス (Eustathius) という人物がその一人のようであるが、彼を教会として受容するか否かについて、バシレイオス自身の心境の揺れ動きが読み取れる。この移行を成し遂げた者たちの対処について、実践的な側面も含めた内容が書き残されている。

また、書簡 125 はそのエウスタティオスの信仰告白の変化に伴い、彼に正統信仰を受け入れたことの承諾と署名を求める内容が記されている。この書簡には原ニカイア信条の文言の写しが含まれており<sup>16)</sup>、当書簡の最後においてエウスタティオスがその内容を理解し、承諾したことを約束し、証人たちの眼前

15) セバサテのエウスタティオス (Eustathius of Sebasate), アポリナリオス (Apollinarius), パウリノス (Paulinus), マルケルス (Marcellus) の教えを踏襲している者など。

16) 2025 年はニカイア公会議 (325 年) から 1700 年を迎える節目の年であり、様々な催しや学会が予定されている。

で自らが署名した様子を窺うことができる。

書簡 251 では、正しい信仰へと導かれた人たちへの励ましと、その信仰理解に留まり続けるようにと鼓舞するバシリエオスの言葉が見られる。バシリエオスは、自分たちの信条が変わらず同じものであるとの確証を述べ、その正統信仰の理解に留まるよう激励するのである。

こうしてバシリエオスとその友である監督たちは正統信仰の固守に奔走し、書簡を通してその知識と理解の拡散に努めたのである。教会の一致は容易に崩れることを身をもって体験していた彼らにとって、こうしたやり取りは不可欠であり、相互に情報交換を頻繁に行うことで、不測の事態に対処できる体制を構築していたのだと考えられる。正当信仰を固守し続けるバシリエオスの姿は、監督に委ねられた、あるいは「伝道者」に託された任務の一つを示すものと捉えられるのである。そしてそれは、異端的教示に追随してしまった者たちが正統的理に立ち帰ろうとした際に、その信仰の信憑性を確かめると共に、寛容に受容していた様子も示していた。書簡を通して見えてくることは、こうした「伝道者」であった監督たちの葛藤と職務をまとうしようとする真摯な姿であり、書簡はこのような人たちが教会の福音宣教の働きの一端を担っていたことを物語るのである。

## 5. 書簡を執筆し、「メディア伝道」を担う者

書簡を執筆し、送付し続けるという働きは並大抵のことではないと推測される。安易に継続できるものではない。特に古代社会において、書簡執筆に多くのエネルギーを注ぐことは多くの犠牲、特に費用面における犠牲を伴う献身的な業であったと考えられる。そもそも書簡を執筆し、送付するという行為は何を意味し、なぜバシリエオスをはじめとする 4 世紀の教父たちは継続して書き綴ったのであろうか。

バシリエオスの書簡には、公的な内容と共に私的な内容も非常に多く書き残されている。それはある特殊な時代背景の世界観と人生観を反映したもので、後代に至るまで書き残していくことを想定していたのかどうかは不明である

が、書簡に綴られ刻まれた言葉は後の人々にまで影響を与え続けることになった。アレキサンデル・リールの表現を借用するならば、書簡とは「一定の文化的時代的空間的制約の中で保たれる一つの特異なジャンル」<sup>17)</sup> である。しかし、その制約の中で醸成され展開された事柄が、後の世代の人々の思考を左右し、多くのことを示唆し、熟考することを促すのである。正統神学がまだ完全には確立されていない中で、バシリオスの書簡はニカイア信仰の根幹の確認作業を担い、後の381年のコンスタンティノポリス公会議にて制定されることになる三位一体の教義の萌芽となる内容が書き残されている。これらの言葉は時空を超えて、様々な意味において現代の我々に対しても多くの教示を齎すため、裨益するところが大きいのである。

書簡は情報の伝達方途であった。それは信仰の伝達手段であり、福音の担い手とも言える媒体であった。もっとも、バシリオスの時代の監督たちの職務というのは、会議に参加し、礼拝の典礼を整え、教会あるいは修道制規則を構築するといったことであり、所謂、現代の我々が思い描く伝道方法とはかけ離れている。しかし、彼らは書簡や著書を書き残すことで、また、語られた説教の言葉を書き残す形で、後世に伝達し続けたのである。後代の人々はこれらの書き残された言葉を写本することで、教科書として使っていた可能性があるとの指摘もなされている<sup>18)</sup>。

中世初期から盛期のことになるが、こうした伝達の継承を担ったのが修道士たちであったことを、大貫俊夫氏らが改めて指摘している。写本の制作という作業を修道院の写字室（scriptorium）が担っていた。この写本制作の作業を通して「古代からの知の伝統がキリスト教文化醸成のために継承され、未来のために活用された」<sup>19)</sup> ことを忘れてはならないと指摘している。

17) Alexander Riehle, *Byzantine Epistolography: A Historical and Historiographical Sketch*, Leiden: Brill, 2020, p. 5.

18) この点は田中徳子師と本城仰太師から勉強会にてご教示いただいた。今後の更なる研究課題としてここに挙げておきたい。

19) 大貫俊夫他編『修道制と中世書物——メディアの比較宗教史に向けて』（八坂書房, 2024年), 21頁。

書簡等の文書を通して、またそれらに書き記された言葉が伝達されることによって、教会は形成されていったと言える<sup>20)</sup>。教会の形成が究極的にキリスト教の教理を担い伝達することに繋がり、更には文化形成にも多大な影響を与えることになったことは見過ごされてはならない点であろう。

何が正統的理解で何が異端的なのか、その基準も、最終的には公会議を通して制定され周知され継承されるのであるが、公会議に至るまでの醸成過程が、バシリエオスたちによる働きを通して担われ実践されたと言える。この一連の文書伝達的伝道方途は、我々現代の教会での「メディア伝道」に通ずるものとして存在していると言っても過言ではないのだと考える。こうして書簡を執筆し、教会を指導し、監督たちを鼓舞することが、バシリエオスの書簡を通して垣間見られる「伝道者」としてのるべき姿の一つと言えるのである。

## 6. おわりに

本論文ではバシリエオスの書簡の一部を通して、4世紀の教父たちの目指した「伝道者」像なるものについての考察を試みた。「伝道者」という言葉が書簡の中には見られないことから、少々、強引な議論となってしまったことは否めない。ただ、その中でも教会の指導者として立てられた者として、キリストの体である教会のために多大な労力と時間を費やし、生涯を捧げた者の姿を垣間見るという目的は達成されたのではないかと考える。書簡という媒体を通して語られた言葉の数々が、多くの手によって書き写され、後代へと語り継がれ刻まれていった過程において、そのミッションは多くの実を結ぶこととなったのだと言える。こうして古代の書簡は、現代の我々の時代においてもその力を

20) 教会形成の過程において欠かせないのが聖書理解と解釈、そして説教の言葉であると考えられる。バシリエオスは自身の書簡においても自らの聖書理解と解釈についての説明を行っており（例：書簡260における創世記4章15節の解釈についての説明等）、書簡のやり取りを通して正しい聖書理解の拡散という目的を果たそうと試みていた様子が窺える。説教に関しては『ヘクサエメロン』や詩編の説教が残されているが、こうした言葉も教会形成と伝道のために用いられたと考えられ、ここでも文書伝道を担う「伝道者」の姿というものを見て取ることができると言える。

発揮し、多くの示唆と教示を与え続けているのである。これらの言葉に傾聴することは、21世紀の我々にとっても裨益するところが大きいと言える。

(いいだ・あおぐ)